

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11907

研究課題名（和文）生活保護受給者のアディクションによる社会的困窮支援プログラムの実証

研究課題名（英文）The actual proof of the social poverty support program by a temporary-assistance recipient owing to addiction

研究代表者

水谷 聖子（MIZUTANI, Seiko）

日本福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：80259366

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：ホームレス経験者の中には、アディクション（嗜癖）によって生活困窮を繰り返す人がいる。しかし、彼らが生活保護受給時にアディクションの適切な治療を受けていることはほとんどなく、既存のグループや組織にもつながっていない。生活困窮者支援団体においてアディクションで生活困窮を繰り返す可能性のある当事者への家計相談、ミーティングによる継続支援の実施と検証を行った。ワークブックや対話を重視したミーティングに参加することで、断酒やハームリダクションにつながっていた。また、唾液調査、質問紙調査のデータ分析の結果、カレンダーを活用し家計に見通しをもつことが成功体験につながり、他者との関係構築にもつながっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ホームレス経験者のなかにアディクション（嗜癖）によって生活困窮を繰り返す人がいるにも関わらず、生活保護受給時にアディクションの治療や既存の組織にもつながっていないことが多い。病的賭博は明確な治療法が確立されていない課題があるなか、生活困窮者支援団体においてワークブックやカレンダーを活用した定期ミーティングを開催した。生活の振り返りや家計に見通しをもつ可視化、対話を重視したかわりには、断酒・断薬の継続やハームリダクションになっていた。他者との関係性の再構築の機会になっていた。生活困窮者のアディクションからの解放や健康格差是正の一助として、本プログラムは第3次予防として貴重な機会になっていた。

研究成果の概要（英文）：There are those who repeat poor livelihood by addiction among the former 'homeless'. However, they are hardly undergoing suitable medical treatment to addiction at the time of temporary-assistance receipt, and they are not connected with an existing group or organization. We, a needs person supporting group, performed the enforcement and verification of continuous support by family-finance consultation and meetings to the poor livelihood repeaters by addiction. Their participating in the meeting which thought the workbook and the dialog as important led to their stop-drinking or harm-reduction. Moreover, as a result of the data analysis of saliva investigation and question paper investigation, having a prospect in a family finance by utilizing a calendar led to success experience, and it had led also to related construction with the others.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：アディクション アディクションミーティング スキーマ ワークブック ハームリダクション ストレンクスモデル 自己効力感 クロス・アディクション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

平成 24 年 1 月に実施されたホームレスの全国調査では、ホームレスは全国に 9,576 人が確認され、平成 15 年 1 月から 15,720 人と大幅に減少しているが、再び野宿に戻る例が少ないとの指摘もある(後藤, 2007 基礎生活保障問題研究会(名古屋市委託), 2013)。ホームレス状態を脱する前からの生活課題・健康課題、ホームレス状態を脱した後に生じる生活課題・健康課題を解消し、地域社会の中での生活を継続するための支援のあり方は喫緊の課題である。

平成 14 年に施行された「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」は、平成 24 年 8 月に 10 年の有効期限前に延期された。ホームレスを野宿者に限定していることそのものの問題、住居を失い、ネットカフェなどに寝泊まりする「ネットカフェ難民」、ホームレスを無料低額宿泊所等に入所させ生活保護費を搾取している貧困ビジネスの問題など、安易に廃止できない社会状況があり、ホームレス支援システムの課題が顕在化していた。

平成 25 年 12 月に生活困窮者自立支援法が成立し、官民協働による地域の支援体制の構築、自立相談、住居確保給付金、就労準備支援、家計相談支援など包摂的に実施されることになった。しかし、これまでの支援活動を通して、生活困窮に至る過程に、生活、仕事、家族や友人との人間関係、借金や家賃滞納など複雑で多様な問題を抱えていることが多く、簡単にはいかないことが予測された。特にアディクション(嗜癖)によって、生活破綻や健康を害している場合は、より困難が生じ、健康支援の必要性があると考えられた。

佐藤(2007, 2011)は、平成 23 年のパチンコ産業を 20 兆円ビジネスと述べている。平成 19 年は 30 兆円で、自動車産業 40 兆円、国民総医療費 35 兆円に匹敵しており、日本社会において欠かせない産業の一端を担っているといっても過言ではない。平成 23 年全国のパチンコ店は 12,000 件、パチンコ総台数は 500 万台、日本を除く世界のパチンコ台数は、250 万台にすぎず、世界の国々はパチンコをギャンブルとして正当に評価し、規制している。競馬、競艇、競輪、宝くじ、サッカーくじなど公営ギャンブルの担当省庁は、縦割りである。まして遊技に位置付けられているパチンコやパチスロは非該当である。

帚木(2010)は、ギャンブル依存の治療手順として、週 1 回以上の自助グループへの参加、月に 1 回の通院または相談が有効であると述べている。鶴身(2013)は、病的賭博は治療が必要な疾患ではあるが、現在のところ病的賭博そのものに対する薬物療法が未確立であるため、適切な対応が行われていないと述べている。

筆者が企画運営していた生活困窮者支援団体有志による「クロス・アディクションに関する研究会」において、支援者の多くが、ギャンブルによるアディクションが生活困窮の要因として大きく絡んでいると考えていた。松下(2011)は、依存症は「喪失の病」であり、「家族の病」であり、「生き方の病である」と述べている。心性である依存症は、現在一律の生活保護や障害年金支給システムがより依存性を悪化させている可能性がある。そのため、彼らの特性、現状の社会システムや医学の状況を踏まえた支援プログラムの開発が欠かせない。

2. 研究の目的

生活保護受給者の中にはアルコールやギャンブルが原因で生活が破綻し、家族との関係も途絶え、生活保護受給に至るケースがある。変えられない生活保護費の支払いや年金支給システム、アルコールやギャンブルが身近にいつでも手の届くところにある生活環境など「変えられない社会環境」がある。「変えられない社会環境」のなかで、「社会環境を受け入れ」ながら、その人らしい生活につながる支援が欠かせない。そのために取り組んでいるプログラムの効果を検証する必要がある。プログラムは、集団によるアプローチと個別によるアプローチを試みた。どちらのプログラムも共通しているのは、管理ではなく、生活に見通しを持ち、その人らしさやストレスを大切にしたい認知行動を基盤にしている。また、継続して安定した生活、失敗時の振り返りや自己健康管理につながる内容としている。生活困窮者支援団体によるインフォーマルなプログラムの確立を目指す。プログラムの効果は、参加者の生理学知見、インタビュー調査、プログラム運営をする担当者へのインタビュー調査などをもとに分析し効果を検証する。

3. 研究の方法

本研究は、A. 家計相談対象者に年に 1 回継続して行う インタビュー調査と歯科健診(1 回/年)、質問紙調査(1 回/年)、質問紙調査と唾液採取(毎週 1 回合計 10 回)、B. 集団プログラム(アディクションミーティング)参加者を対象に、毎回の参加記録とインタビュー調査、家計相談や集団プログラムの企画運営を担う相談員やボランティアの活動記録とインタビュー調査とした。

A. 家計相談対象者を対象とした調査

(1) インタビュー調査と歯科健診(1 回/年)

インタビュー調査は、半構成的インタビュー調査とした。初回は、幼少期の生活状況、経済状況、学校生活、学業、部活、友人関係、結婚、仕事などライフヒストリーを聞き取った。毎年インタビューでは、現在の生活状況、健康状態とアディクションの状況、生活保護申請前の生活状況、健康状態とアディクションの状況、生活保護申請時の生活状況、健康状態とアディクションの状況、生活保護申請後の生活状況、健康状態とアディクションの状況、1 年間の生活状況、健康状態とアディクションの状況、今後の望ましい生活、健康とアディクシ

ンとの付き合いについて

(2) 質問紙調査(1回/年)

ギャンブルチェック表 20 項目(病的賭博に関するアメリカの精神医学協会のチェックリストを参考にパチンコ依存度を診断するために作成されたものの日本語訳版)、ニコチン依存(TD テスト)チェックシート 10 項目、アルコール依存(AUDID)チェックシート 10 項目(WHO(世界保健機関)が作成したチェックシート、2017 年度から成人期の ADHD の自己記入式症状チェックリスト(ASRS-v1.1) 18 項目を行った。

(3) 質問紙調査と唾液採取は年に 1 回毎週 1 回を 10 回(約 2 か月)

抑うつ感 12 項目、日本版幸福感尺度 4 項目、ストレス対処能力(SOC) 13 項目、日常生活活動、運動(6 項目)、10cm 線分法による飲酒、喫煙、ギャンブル、ネット・ゲーム欲求、お金のやりくりとした。

B. 集団プログラム(アディクションミーティング)

アディクションミーティング運用マニュアルを作成した。週に 1 回 90 分程度の内容として、1 週間の振り返り、ワークブック、テーマトーク、テーマアクションなどとした。運営マニュアルを作成し、マニュアルには、準備、運営、振り返り、飲食物の準備、受付名簿、出席管理ができるように、活動報告書と特記事項の個人ファイルへの記載をするようにした。1 週間の振り返りと見通しをもった生活イメージができるようにカレンダーを活用した。1 週間の振り返り・生活状況では、青・黄・赤・白として可視化できるようにした。ワークブックは、2016 年～SMARPP24 を利用し、その後適宜、アルコール、ギャンブル、ニコチン依存に関するワークブックを追加し、平成 29 年度より松本俊彦・伊藤絵美(2017)薬物離脱ワークブック第 2 部 金剛出版を用いた。「やめられない」、やりたくて仕方がない時に「つらいと感じる」など気持ちを落ち着かせる方法、前向きな考え方、じょうずに社会生活を送る方法などを学ぶ。どのように自分らしく生きていくのかを考えられるようにした。テーマトークは、例題を数例挙げながら、参加者が決まるようにした。自分は依存症だと思う時と思わない時がある。それはどんな時か。一番苦しかった時はどんな時か。やりくり出来たら何がしたいか、今一番こまっていること、感謝していることなどを例題とした。テーマアクションは、依存症から回復した人や依存症の専門家を招いて、話を聞く、自助グループを見学に行くなどとした。

新年度や新規参加者があった場合は、原則は、市民団体である NPO 法人ささしまサポートセンターで作成した『アパート生活のしおり』をベースに、参加者の発言を否定しない、参加者の発言を強要しない、参加者の発言内容を他者に話さないなどの基本ルールの確認をおこなった。

毎回の活動終了後の企画運営の記録は、日付、時間、参加者人数、参加者氏名、参加者の状況(観察事項)、担当者所感とした。また、個別の変化や気づきなどの記載するようにした。

4. 研究成果

(1) 数年間にわたり毎週継続することで、アディクションによる生活破綻につながる恐れのある自分自身の行動パターン、思考パターンを意識化することにつながり、生活破綻に至らずアパート生活の維持継続につながっていた。

(2) 集団プログラム 2016 年 7 月～2018 年 3 月の分析結果では、参加実人数は 12 人で、1 回の参加者数は 1～3 人であった。継続して参加しているのは 5 人で、中断者 7 人であった。中断した理由は、就労のためミーティング時間が合わなくなったため個別による継続者が 3 人。参加メンバーの後押しを受けながらリハビリ施設に入居したのは 2 人であった。ミーティングは、お茶を飲みながら『SMARPP(アルコール、薬物など物質使用障害プログラム)』の読み合わせを行い、当初は、「薬物は関係ないし犯罪だ」と、非難する発言から話し合いにならない雰囲気になることもあった。回を重ねる中で、依存している物質ではなく自分自身のこころのあり様に関心を向け、当事者同士の意見交換や会話を楽しむ場面も見られるようになっていた。参加者からは「ミーティングに参加して本気にやりなおしたいと思った。」「やっぱりパチンコ店の前を通ると行きたくなくなる」など本音を吐露する場にもなっていた。ハームリダクションは、健康障害につながる行動を抑制するのではなく、逆に勧めるものでもない。お茶を飲みながらワークブックの読み合わせ、仲間や支援者らとの交流や対話が、『自らの人生を自ら考える』きっかけづくりになっている。また、NPO 法人ささしまサポートセンターの生活困窮者への支援に対する理念や実践が当事者の思いを受け止める力のベースとなり、専門職がいない環境にも関わらずプログラムに功を奏したと思われる。

(3) 知的障害、精神障害、発達障害のある方のアディクション状態とチームアプローチによる支援の変化の過程においては、医療による精神科訪問診療・訪問看護の介入を含めて行動変容理論による分析を試みた。精神科訪問診療・訪問看護では、ICF モデルによる対象理解、生活臨床アプローチ、ストレングスモデル、アルコールやギャンブルなどのワークブックの活用などを試みた。

クロス・アディクションで生活破綻を繰り返していた 50 代男性は、出会った頃は、ひげが伸び、ぼさぼさの髪の間からフケがぼろりと落ち、路上生活かアパート生活かの判断がつかない様相であった。家賃滞納 2 か月(72,000 円程度)、ガスは停止。電気代 1 か月滞納、居酒屋やスナック 3 店に合計 32,000 円の借金があった。これまでもさまざまな支援団体がかかわり、生活相談、食糧支援を受けてきた。精神科デイケアに通所し抗酒剤による治療を行った時期もあった。

生活保護歴は4年、診断名はADHD、双極性感情障害、ギャンブル依存症、アルコール依存症、ニコチン依存症、解離性大動脈瘤であった。

関わり開始～2年間は、NPO法人ささしまサポートセンターの生活相談・家計相談では、当事者の自尊心や自己効力感など本人の思いを大切に支援をこころがけ、1か月先の見通しがもてる『生活の計画』と『1週間の振り返り』を繰り返し継続した。借金の返済と滞納をなくすのに3か月程度要した。その後滞納はなくなったが、生活保護費が支払われるとパチンコ、スナックのはしご酒で生活費がなくなる状況がたびたび繰り返され支援者の言葉を活かすことができない状況が続いた。禁煙外来は3回、4回と毎年継続した。毎週の繰り返し家計相談から自らの生活を可視化し、言語化するようになっていった。スナックやパチンコに行かない工夫などを自ら語るようになった。本人が自ら望む生活を意識化するに至った行動変容段階の「熟考前期」で2年を要した。

飲酒による泥酔で救急搬送されたときに、解離性胸部大動脈瘤の診断を受ける。定期内服が処方されるも飲酒により内服できなかった。眠剤の処方はあるも親身になってもらえていないなど受診していた精神科への不信感が募った。5回目の禁煙外来は、医師の診察に併せて看護師の面接を併用している医療機関に変更した。また、精神科の医療機関を変更し、アルコール依存症、ギャンブル依存症に加え、発達障害としてADHD、うつ病の診断を受け、訪問診療・訪問看護が導入された。長年の飲酒、ギャンブルにより表出されている生活現象に着目しがちであったが、生きづらさの原疾患が明らかになった。NPO法人ささしまサポートセンターの家計相談や面接を継続しながら、めざしたい生活イメージとのギャップを感じる、2年から3年6か月の「準備期」であった。

NPO法人ささしまサポートセンターのボランティア医療職が中心となり訪問診療・訪問看護を開始した。この訪問診療・訪問看護の特徴は、本人の価値意識に着目し、生活背景、家族とのかかわりなどを踏まえた人生の解消支援である生活臨床アプローチ（伊勢田 2016）と人々のリカバリー、改善、生活の質を探り出し、その人らしさの強みを引き出すストレングスモデル（Charles A Rapp, 田中英樹訳, 2014）である。訪問看護では、萱間(2016)のストレングスモデルによるストレングスマッピングシートを本人と一緒に対話を重視しながら作成した。訪問診療・訪問看護チーム、NPO法人ささしまサポートセンター、福祉事業所など関係機関とも共有し可視化できるようにした。その後訪問看護時にSMARPPやギャンブル依存のワークブックにも取り組み、NPO法人ささしまサポートセンターのアディクションミーティングへの参加を開始した。インフォーマルサービスとしてのNPO法人ささしまサポートセンターの支援、適切な医療と精神障害者福祉手帳の申請を行い、福祉サービスが開始された。アルコール・ギャンブル依存の受容と行動変容として自身の生活障害への関心とこれからの生活への目標を抱く、3年6か月～4年間の「実行期」であった。

社会資源利用状況は、フォーマルサービスとして精神自立支援医療としての精神科訪問診療、訪問看護〔3回/週〕、ヘルパーによる家事援助〔2回/週〕、生活保護。インフォーマルサポートとして、NPO法人ささしまサポートセンターの生活相談・家計相談、アディクションミーティング〔1回/週〕、自費によるデイサービス利用の入浴〔1回/週〕であった。適切な医療と福祉サービスを利用しながら、アルコールやギャンブル依存で隠れていた抑うつ状態とそう状態が出現し、双極性障害の診断を受け、内服薬を調整しながらの生活を継続していた。ストレスマッピングシートを共有しながら、アルコール、パチンコともにやめ貯蓄し、ヤニに包まれたアパートから転宅した。4年～5年目の「維持期」に至った。

引用文献・参考文献

- ・厚生労働省（2019）厚生労働省 HP ホームレス調査
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_04461.html（2019年6月5日閲覧）
- ・後藤広史（2007）前路上生活者が施設から『自己退所』する要因．社会福祉学．47（4）pp31-42
- ・基礎生活保障問題研究会（名古屋市委託）（2013）第2期名古屋市ホームレスの自立の支援等に関する実施計画評価報告書 第2章ホームレス生活実態調査から pp12-66
- ・佐藤仁（2007）パチンコの経済学～内側30兆円ビジネスの不思議～ 東洋経済新聞社
- ・佐藤仁（2010）続パチンコの経済学 21兆円ビジネスの裏で何が起きているのか？ 東洋経済新聞社
- ・帚木蓬生（2010）やめられないーギャンブル地獄からの生還、集英社
- ・鶴身孝介、高橋英彦（2013）ギャンブルにはまる脳 BRAIN and NERVE 65（1）77-83
- ・松下年子（2011）アディクション看護学 メチカルフレンド社 pp2-3、pp41-44
- ・水谷聖子（2018）調査からみえてきたホームレス経験者のアディクションを取り巻く課題 地域ケアリング 第20巻 第3号 pp.46-50
- ・松本俊彦（2016）よくわかる SMARPP あなたにもできる薬物依存者支援 金剛出版

- ・松本俊彦 今村扶美 (2015) SMARPP-24 物質使用障害治療プログラム
- ・松本俊彦、伊藤絵美監修 (2017) 薬物離脱ワークブック 金剛出版
- ・UCLA (州立カルフォルニア大学ロサンゼルス校)(2019) Gambling Studies Program (ギャンブル研究プログラム) Office of Problem Gambling (ギャンブル依存症対策事務局) California Department of Alcohol & Drug Programs (カリフォルニア州アルコール薬物乱用対策局) ギャンブル依存症からの自由を目指して自己管理ワークブック
http://www.uclagambingprogram.org/treatment/wb/JP_WB.pdf 2019年6月15日閲覧
- ・ジェフリー・E・ヤング, ジャネット・S・クロスコ, マジョリエ・E・ウェイシャー 著 / 伊藤絵美監訳 (2008) スキーマ療法 パーソナリティの問題に対する統合的認知行動療法アプローチ
- ・西尾彰泰 堀田亮 佐渡忠洋ら (2015) 名古屋市におけるホームレスのメンタルヘルス実態調査 精神・知的障害がホームレスに至った原因や抜け出せない理由に与える影響 社会医学研究 32(2) p103-110
- ・Nishio A, Yamamoto Y, Horita R et al. (2015) "Prevalence of Mental Illness, Cognitive Disability, and Their Overlap among the Homeless in Nagoya, Japan." PLoS ONE. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0138052>
- ・Nishio A, Horita R, Sado T (2017) "Causes of homelessness prevalence: Relationship between homelessness and disability." Psychiatry and Clinical Neurosciences. 72(3), p.180-188
- ・水谷聖子ら (2018) 市民団体・多機関との連携協働による支援 クロスアディクションで生活困窮を繰り返していた男性の事例報告 第48回(平成29年度)日本看護学会論文集 在宅看護 pp71-74
- ・伊勢田堯 (2016) 生活臨床 その人の人生を考える精神科臨床 , 第1回生活臨床研究会講義資料,
- ・Charles A Rapp, Richaerd J Gosha : "The Strengths Model" (4) , 2011 , 田中英樹訳, ストレングスモデル (3) , 金剛出版, p.64, 2014.
- ・萱間真美 (2016) ストレングスモデル実践活用術, 医学書院, p92

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 水谷聖子、大橋裕子、澤田さやか、鶴飼亜紀、森本深雪	4. 巻 21
2. 論文標題 知的障害のある双子の兄弟への訪問看護-路上生活から市営住宅に至ったチームアプローチによる支援-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 78-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 水谷聖子、澤田さやか、鶴飼亜紀、渡邊有紀子、森本深雪	4. 巻 48
2. 論文標題 市民団体・多機関との連携協働による支援-クロスアディクションで生活困窮を繰り返していた男子の事例報告-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本看護学会論文集 在宅看護	6. 最初と最後の頁 71-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 水谷聖子	4. 巻 20
2. 論文標題 ホームレス経験者のアディクション(嗜好)を取り巻く課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 43-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、水谷聖子、渡邊貴博、松浦健伸、田村修、植原亮介、山本真由美	4. 巻 32
2. 論文標題 名古屋市におけるホームレスのメンタルヘルス実態調査-精神・知的障害がホームレスに至った原因や抜け出せない理由に与える影響-	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 社会医学研究	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takahiro Yoshizumi, Seiko Mizutani, Soshiro Yamada	4. 巻 118(2)
2. 論文標題 Deprivation and Social Support in Mental Health of Welfare Recipients in Japan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Psychological Reports	6. 最初と最後の頁 372-386
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0033294116639183	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 水谷聖子
2. 発表標題 クロスアディクションがあるホームレス経験者の口腔状態
3. 学会等名 第15回日本口腔ケア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水谷聖子、澤田さやか、鶴飼亜紀、渡邊有紀子、大橋裕子、森本深雪
2. 発表標題 知的障害のある双子の兄弟への訪問看護
3. 学会等名 第49回日本看護学会 在宅看護
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水谷聖子、大橋裕子、中村廣隆、岡本ちさと
2. 発表標題 クロスアディクションのあるホームレス経験者のミーティングによるヘルリダクション-SMARPP、ギャンブル依存のワークブックの活用を通して-
3. 学会等名 第77回 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水谷聖子 松永昌宏 長谷川真美 小林章雄
2. 発表標題 クロスアディクションがあるホームレス経験者の家計のやりくり-唾液中コルチゾル、抑うつと家計のやりくりとの関連-
3. 学会等名 第74回 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山田壮志郎編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 237
3. 書名 ホームレス経験者が地域で定着できる条件は何か-パネル調査からみた生活困窮者支援の課題-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松永 昌宏 (MATUNAGA Masahiro) (00533960)	愛知医科大学・医学部・講師 (33920)	
研究分担者	長谷川 真美 (HASEGAWA Mami) (00559148)	愛知医科大学・看護学部・助教 (33920)	2016年5月25日削除
研究分担者	水谷 勇 (MIZUTANI Isamu) (60190641)	神戸学院大学・人文学部・教授 (34509)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	西尾 彰泰 (NISHIO Akihiro) (90402172)	岐阜大学・保健管理センター・准教授 (13701)	
研究 分担者	肥田 佳美 (HIDA Yoshimi) (10587017)	日本福祉大学・看護学部・准教授 (33918)	2016年5月25日追加 2017年3月21日削除
研究 分担者	大橋 裕子 (OOHASHI Yuuko) (70352911)	日本福祉大学・看護学部・准教授 (33918)	2017年3月21日追加